

我が衣こども

色つけ染めむ

味酒 三室の山は

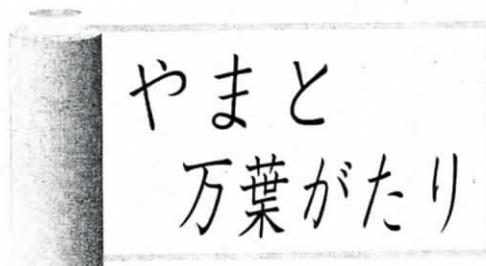
黄葉しにけり

柿本人麻呂歌集(巻七・一〇九四)

いつの間にか日暮れが
 ずいぶん早くなり、
 朝晩は肌寒さを感じる
 ようにもなりました。
 万葉文化館の庭園の木
 々も刻一刻と鮮やかさ
 を増しています。

この歌では、そんな
 山の紅葉が詠まれてい
 ます。詠まれた年代も
 作者も不明の歌を集め
 た巻七に「山を詠める」
 と題してまとめられた

7首の歌のうちの1首
 です。「柿本人麻呂歌
 集」から引用した歌だ
 と記されていますが、
 人麻呂自身の作歌かど
 うかはわかりません。
 「三室の山」とは、
 固有名詞ではなく神の
 降臨する場所を意味す
 る普通名詞ミムロを冠
 した表現です。同様の
 意味でミモロともい
 い、その代表例といえ



るのが三輪山でした。
 この歌ではことに「味
 酒」という「三輪」に
 かかる枕詞が用いられ
 ていることから、「三
 室の山」とは三輪山を
 指していたと考えられ
 ます。

「味酒」が「三輪」
 の枕詞になったのは、
 神酒やそれを入れる甕
 をミワとも呼んだこと
 に由来するといわれま

す。
 衣に色を付ける、染
 めるといった表現は、
 象徴的な意味でも用い
 られました。例えば「わ
 が背子が白妙衣行き
 触ればほひぬべくも
 もみつ山かも」(巻十
 ・二一九)と、そこ
 を通っただけで白い衣
 が色づくに違いないほ
 どに見事に紅葉した山
 を詠んだ歌もありま
 す。一〇九四番歌は「我
 が衣色つけ染めむ」と
 あるので、美しく色づ
 いた秋の三輪山を訪れ
 (県立万葉文化館指導
 研究員・井上さやか)

【訳】私の衣に色をつけて染めよう。
 味酒の三室の山は紅葉していることだ。

であったといえます。
 「黄葉」は特定の植
 物名ではなく動詞モミ
 ツの名詞形で、色づい
 た葉を指しました。現
 代では「紅葉」と書く
 のが一般的ですが、『万
 葉集』ではほとんどの
 歌で「黄葉」と記され
 ます。黄色に色づく植
 物が多かったというわ
 けではなく、中国文学
 の表記の影響とみられ
 ています。

古ゆ 人の言ひくる

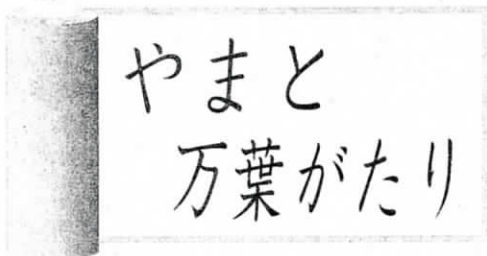
老人の 変若つといふ水そ 名に負ふ滝の瀬

大伴 東人(あづまひと) 卷六・一〇三四

宮で詠まれた歌です。若返りの水と伝わる有名な滝とは「養老の滝」であり、かつての元正天皇の2度の行幸を想起しつつ詠まれたとみられます。

717年11月17日、「靈亀」から「養老」に改元されました。『続日本紀』によると、同年9月20日に元正天皇が美濃国当耆郡「多度山」の美泉を見て帰京した後、「醴泉は美泉なり。以て老を養ふべし」と詔して改元したとあります。

「多度山」といえば養老山地南端の山であり、元正天皇は改元の詔の中で、『後漢書』光



武帝の「醴泉」の故事などを踏まえつつ、この「醴泉」の水は万病に効く霊水であるとしています。『和名抄』には「醴」の字にコサケの訓が付されており、『漢書』に「酒は百葉の長」ともあります。後世の説話において「養老の滝」が酒の流れ出る滝として描かれたことには、こうし

た背景があったようです。元正天皇は翌年も同地に行幸しており、そのルートは壬申の乱の大海人皇子方の進路を彷彿させるものでした。養老改元の契機となった行幸自体が初めこの歌は、740年の聖武天皇による美濃(県立万葉文化館指導 国行幸の際に「多芸行 研究員・井上さやか)から美濃国を目的地としていたことから、天武天皇(大海人皇子)ゆかりの重要な地と認識されていたことがうかがえます。この歌は、740年大海人皇子方の経路をなぞるように東国を巡行しました。

【訳】昔からずっと人の言い伝えて来た、老人が若がえるという水であるよ。名にそむかぬ滝の瀬よ。